

## メッセーシアウトライン 創世記10:1～32「民族の広がり」

[1-5]「これはノアの息子、セム、ハム、ヤフェテの歴史である。大洪水の後、彼らに息子たちが生まれた。ヤフェテの子らはゴメル、マゴグ、マダイ、ヤワン、トバル、メシェク、ティラス。ゴメルの子らはアシュケナズ、リファテ、トガルマ、ヤワンの子らはエリシャ、タルシシュ、キティム、ドダニム。これらから島々の国民が分かれ出た。それぞれの地に、言語ごとに、その氏族にしたがって、国民となった」

ノアの三人の子らの子どもたちの誕生が大洪水の前ではなく、後であったことは神の摂理であろう。まずヤフェテの七人の子ららの名がここであげられている。「ゴメル」…黒海、カスピ海とコーカーサス山脈一帯に住んだスキタイ(スクテヤ)人の先祖となったと思われる。→コロサイ3:11「マゴグ」…やはりスキタイ人系らしい。→エゼキエル38:2～3, 39:1～2「マダイ」…アッシリヤ東方のメディア人の先祖となったと思われる。「ヤワン」…イオニア人(古ギリシヤ人)の先祖となったと思われる。→イザヤ66:19, エゼキエル27:13, 19「トバル、メシェク」…トバルが小アジア東部に住んだのに対して、メシェクは黒海沿岸の南西部に住んだらしい。→エゼキエル27:13, 38:2～3, 39:1「ティラス」…小アジア西岸とギリシヤ北東部に住んだトラキア人の先祖となったと思われる。ゴメルの子ら、ヤワンの子らはさらに広がり、全体として地中海からカスピ海、そしてメディアに及ぶ地方に分布した諸民族になった。これは今日ではインド・ヨーロッパ人種として分類されている。「島々」とは海につながっているすべての国々を指し、沿岸地方と島々の両方を含む。

[6-7]「ハムの子らはクシュ、ミツライム、プテ、カナン。クシュの子らはセバ、ハビラ、サブタ、ラアマ、サブテカ。ラアマの子らはシェバ、デダン」

「クシュ」…日本語訳聖書ではエチオピアと注釈がつくが、地理的にはエジプトの南の現在のスーダンにあたる。しかし、ハムの子孫としてメソポタミア南部から紅海を越えてアフリカへ広がったという説もある。「ミツライム」…今日のエジプト「プテ」…東アフリカから南アラビヤにわたるプントと呼ばれる人々の先祖となったと思われる。「カナン」…その子孫はカナンの地(現在のパレスチナ)以南に住んだ。この地は性的退廃と偶像礼拝で満ちた国となる。全体的にハムの子孫はカナン以南に分布していると思われる。

[8-12]「クシュはニムロデを生んだ。ニムロデは地上で最初の勇士となった。彼は主の前に力ある狩人であった。それゆえ、『主の前に力ある狩人ニムロデのように』と言われるようになった。彼の王国の始まりは、バベル、ウルク、アッカド、カルネでシンアルの地にあった。その地から彼はアッシュルに進出し、ニネベ、レホボテ・イル、カルフ、およびニネベとカルフの間のレセンを建てた。それは大きな町であった」

氏族の系図がここで急に一人の人物の描写に変わる。「ニムロデ」…「反逆者」の意味であると思われる。「クシュは…生んだ」とはクシュの直接の子ではなく、クシュの子孫である氏族の一つに属する人を意味する。それゆえ民族表には含まれていない。彼は狩人として古代人の間でよく知られた英雄であつたらしい。「力ある狩人」とは文字通りの意味もあるであろうが、政治的、軍事的な意味で目的を必

ず達成するすぐれた戦略家を意味すると思われる。彼は容赦ない殺戮によって広大な支配権を手に入れた人物であったのかもしれない。その場合、彼は「主の前に反逆する者」として知られていたことになる。「バベル」…メソポタミア南部のバビロンのこと。「ウルク」…バビロンの南東約2百キロの地。「アッカド」…バビロンの北にある地。「カルネ」…場所不明。「シンアルの地」…バビロンを中心とするメソポタミア地域。バビロニヤとも言う。

「アッシュル」…アッシリヤ。北部メソポタミア地方。「ニネベ」…ティグリス河畔にあるアッシリヤの中心都市。「レホボテ・イル」…ニネベの郊外の町のひとつと考えられている。「カルフ」…ニネベ南方にあった町。「レセン」…詳しい場所不明。ニムロデは大洪水後にハムの子クシュの子孫から出た神に逆らう最初の権力者としてここに取り上げられているのであろう。以後、神に逆らう人間の歴史はこのような人物がしばしば現れて来ることを教えている。

[13-14]「ミツライムが生んだのは……」ここに出て来る名前はミツライム（エジプト）とのかかわりで広がっている人々であり、エジプト近辺及び小アジアに定着した人々である。

[15-20]「カナンが生んだのは長子シドン、ヒッタイト、……それでカナン人の領土は、シドンからゲラルに向かって、ガザに至り、ソドム、ゴモラ、アダマ、ツェボイムに向かって、ラシャにまで及んだ。以上が、その氏族、その言語、その地、国民ごとの、ハムの子孫である」

ここにはハムの子孫として住んだカナンの地の人々の名があげられている。これらは個人名ではなくカナンの子孫としての氏族、国民である。それゆえ「長子」とはカナンの中心的な子孫という意味であろう。「シドン」…地中海沿岸のフェニキヤの地。「ヒッタイト」…カナンの地に住んでいた。→創世記26:34, 27:46「ゲラル」…ガザの南東約20キロの地。「ガザ」…地中海沿岸南部。後にペリシテ人が住む。「ソドム、ゴモラ、アダマ、ツェボイム」…死海南部の町。「ラシャ」…場所不明。

[21-32]「セムにも子が生まれた。セムはエベルのすべての子孫の先祖であり、ヤフェテの兄であった。セムの子らはエラム、アッシュル、アルパクシャデ、ルデ、アラム。アラムの子らはウツ、フル、ゲテル、マシュ。アルパクシャデはシェラフを生み、シェラフはエベルを生んだ。エベルには二人の息子が生まれ、一人の名はペレグであった。その時代に地が分けられたからである。彼の兄弟の名はヨクタンであった。……彼らが住んだ地は、メシャからセファルに及ぶ東の高原地帯であった。以上が、その氏族、その言語、その地、国民ごとの、セムの子孫である。以上が、それぞれの家系による、国民ごとの、ノアの子孫の諸氏族である。大洪水の後、彼らからもろもろの国民が分かれ出たのである」

ここから創世記記者の関心の中心としてのセムの家系が取り上げられる。最も重要な部分を最後に語る方式は、セムの子孫の系図そのものにも現れている。それはアブラハムに至るペレグの系列は11:11節以後になり、この10章ではエベルの子のうちヨクタンの系列が先に記述されていることからわかる。ここでセムの子孫のうちエベルの名があげられているのは、彼からアブラハムへと続いていくことを示すためであろう。→11:16 エベルは「かなた」または「越えて」という意味でここから「かなたの人（ヘブル人）」という名が出て来た。ヘブル人という呼び名は通常、イスラエル人を外国人と区別して語るときに用いられる。→14:13

おそらく「ユーフラテス川の向こう」からの人を指すのであろう。→ヨシュア記24:2

「セムは…ヤフェテの兄であった」との記述と9:24と合わせるとセム、ヤフェテ、ハムというのが兄弟の順序であると思われる。ペレグの時代に地が分けられたとの記述は11章のバベルの塔の事件で民族が各地に散らされたことか、ノアの洪水後の地殻変動で大地が分けられ、移動したことを示しているのか不明である。セムの子孫の名前からわかることは彼らはアッシリヤ、バビロニヤ、シリヤ、アラビヤ、ペルシャ等を中心として居住したと考えられる。

ヤフェテ系の民族は14、ハム系は30、セム系は26で合計は70となる。ここには全世界に広がったすべての民族が記されているわけではないが、意図的に完全数である70で全人類を代表していると考えられる。この民族表ではノアから広がった人類が一つであることが教えられ、それはこれから語られようとする神の選びの民の救いの歴史が、結局全人類のためであることを示す基盤となるものである。またそこには各民族の分布に反映された神の摂理があり、イスラエルと他の民族との関係も明らかにされている。

すべての民はノアから出ている。そして世界に広がった民族は、おのこの好みと責任において違った道を選び取るのである。→使徒14:16～17, 17:26～27

しかし、創世記9:25～27のノアの預言のように、神の選びの民はセム、エベル、ペレグ、そしてアブラハム、イスラエルと続くセムの子孫から出る。神はこのイスラエルを通して救い主をこの世に来させ、罪のうちに全世界に広がった人類を救おうとされるのである。

→ヨハネ1:9～12, 3:16, 使徒17:30～31